

## ボエチウスの個体論

—*Opuscula sacra* V, cap. III を中心に<sup>(1)</sup>—

坂 口 ふ み

ボエチウスはその第V神学論文において、中世に一つの権威として受けつがれたペルソナの定義〈*naturae rationabilis individua substantia*〉をたて、それを被造非被造の理性的存在に共通するものとした<sup>(2)</sup>。更に第三章の叙述を辿れば、ボエチウスがこれをキリスト論という特殊な枠、また理性的存在という枠にとらえられない、一つの普遍的な個体存在構造論として構想し、その普遍的枠の中で、キリストという特殊な存在の理解・説明を可能にしようとしていると推測される。ただし、その普遍的存在構造論なるものも、当然カルケドンで規定されたキリストという特殊な信仰対象の説明・理解の努力から生じ、かくて世界内存在の構造もあらたな解釈を受けたのであり、いわば *analogia fidei* と *analogia entis* の交錯がここにはある。これは神学のいとなみにつねにつきまとうことであろう。更にその存在理解はともすれば単に物理的・自然学的で非倫理的であるという批判を受けるものであるが、実は存在に対する解釈はつねにそれ自体、その意図においても効果においても行動的・倫理的・政治的なものであり、ある倫理的・宗教的・政治的含意によって形成され、かかる含意を述べ伝えるものである。ボエチウスの個体存在論もそのようなものと思われる。

451年のカルケドン公会議の決定は、キリストという存在について、論理的整合性への挑戦ともみえる定式を確立した。すなわち、「唯一なるキリストが、

二本性の内に *ἐν δύο φύσεσιν* 非混合的・非転化的・非分割的・非分離的に「その一性 *ἕνωσις* のゆえに各本性の差が解消されることなく、むしろ各本性の特性 *ιδιότητες* が一なるペルソナ、一なるヒュポスタシス (*ὑπόστασις*, *subsistentia*) へと集って」存在する<sup>(4)</sup>という。この定式は教皇レオ書簡の宗教的情熱を基礎として成立したものであるが、その表現に哲学的タームを用いており、それ以前の諸公会議決定にも増して、哲学と宗教のからみ合いを如実に示している<sup>(5)</sup>。そしてそれゆえにそれに続く世紀においてこの信条は、それを奉ずるキリスト教思想家に、ギリシヤ的存在論との対決を強いた。この定式を単に「漁夫的に」<sup>(6)</sup>解することに甘んじないとすれば、それは必須なことであった。しかし、ここにはあるためらいがあったように見える。当時のキリスト教界において、カルケドン信条はイエスを世俗化するものであるという声も大きかったことが伝えられる<sup>(7)</sup>。しかし6世紀にあってはこのような哲学的・即物的・自然学的概念性はもはや時代の要求の一部であった。カルケドン信条をめぐるネストリウス派、カルケドン派、単性説派、更にいわゆるネオカルケドン派の対立は、イエスの人性をどう評価するかという宗教的対立であると共に、個体存在の構造をどう考えるかという哲学的な対立でもあった。その際に、当時の哲学者たちによるアリストテレス注解の努力が重要な理論的共通基盤をなしている。Moeller はそのいみで、6世紀初頭ビザンツにおける「スコラ神学」の成立について語り<sup>(8)</sup>、Daley は特にアムモニウスを中心とするアレクサンドリア学派の当時の神学における影響について語る<sup>(9)</sup>。ポエチウスについてもアカデメイアないしムーサイオンのネオプラトニズム系哲学者たちの顕著な影響下に彼なりのポルフェリオス・アリストテレスの論理学注解書を書いていることは多くの人によって論ぜられたところである<sup>(10)</sup>。

Nédoncelle はポエチウスのペルソナ論は統一を持たず多くの視点の間でゆれ動いているとし、Ⅰ. 属性的秩序のもの (イザゴージェー注解)、Ⅱ. 実体的秩序のもの (カテゴリー論・命題論注解、キリスト論、哲学の慰め)、Ⅲ. 関係的なもの (三位一体論) 等の解釈が互いに脈絡なく併存しているとする<sup>(11)</sup>。しか

しポエチウスにおいてもビザンツ・スコラの人々同様、神学論文集は実は彼の論理学書と密接な連関を持っていたのではなかったか。彼の政治的・文化的立場は全ローマ的なものであった。年代的にも、諸注解は神学論文集の直前、または一部それに重なって書かれていると考えられる。<sup>(12)</sup>それらは第V論文を中核として、一つの統一的セオリイをなしているのではあるまいか。結論を先取りすれば、ポエチウスにあっては、イザゴージェー、カテゴリー論、命題論の注解を通して、個体の論理的身分と存在構造に関するネオプラトニスム的な考え方が次第に明瞭化して、個体存在の根底に一種の純粋基体を想定する準備ができる。そのような個体観が、カルケドンのキリスト両性説の要請に対応して、いわば裏返して用いられる。つまり、いかなる規定性をも持たず、しかしすべての規定性に存在を与える純粋基体が、ペルソナの核をなすものとして想定されて、両性説の理論的説明を可能ならしめる。更に第Ⅲ神学論文において、その純粋基体が、個体と第一原理を結ぶきずなにはかならないことが示唆される。

## 1

### 1) イザゴージェー注解における個体

それでは、論理学諸書において、個体 *individuum* はどのように扱われているか。イザゴージェー注解では、まず他の5つの述語 *praedicabilia* (類, 種, 種差, 特性, 付帯性) と異なって、共通的述語でないことが語られる。「いかなる他のものへも分ち与えられず」「自らの下に何ものも持たない」ゆえに「*singula* で *individua* な自らについてしか述語されえない」ものどもである。<sup>(13)</sup>  
*individuum* とは語源的に不可分割性を意味するが、特にこれらの論理学書で問題になるのは論理的に下位のものに「分割的に」述語されないといういみの非分割性であり、それは多なるものに共通的に述語できぬということである。<sup>(14)</sup>

この限り「個体」は個なるものを表現する、ないし指示するタームとして扱われている。しかし、その非共通述語性の理由は、ただちに存在的にその個体の他のものと共通ならざる特性 *proprietas, proprietates* (ポエチウスは単数複

数をあまり厳密に区別せずに両方用いている)に求められる。<sup>(15)</sup>更にこの特性の非共通性、従ってそのタームの他への不可述語性は、その特性が偶有性・付帯性から来ることによって説明される。<sup>(16)</sup>ここで考えられているのは、「指によって指し示される」現実の個体存在とその付帯的属性であり、それは時には述語に対する *subiectum, suppositum* として明瞭に区別して語られる。<sup>(17)</sup>*subiectum* とそれを指すタームとの関係が考察されている箇所もある。すなわち個のタームは、その一つのものを効果的に特定できれば、固有名詞であろうと、ある独特な付帯性によろうと、さまざまでありうる。ただそれらはいずれも他のものには述語できない、と。<sup>(18)</sup>しかし一般には存在の次元と論理の次元の間の流動性・不可分性はポエチウスの叙述の特徴であり、論理構造と存在構造の合致を信ずる当時のネオプラトニズム的思想家に共通するものである。<sup>(19)</sup>ところでここには Nédoncelle がイザゴージェ注解の内に見出し、またのちに見るように Schurr がポエチウスの個体論をすべてそれで説明しようとする、「付帯性による個体化説」がとなえられていると見るべきだろうか。「個性性」を差異性と解釈すれば、個体化の原理は付帯性だといえよう。しかし個体存在を成り立たせるものと解すれば、別の視点が生ずる。同じイザゴージェ注解には、付帯性に対する個体の存在的・論理的先性を述べる箇所もある。あらゆる述語されるもの、類・種・種差・特性・付帯性は本来共通的なものであり、それらが個的になるのはそれらがその内に含まれる個体存在による。<sup>(20)</sup>

## 2) カテゴリー論注解における個体

このような個的存在の、あらゆる他の述語可能なものへの先性は、カテゴリー論注解では更に強調される。アリストテレスに従って、ポエチウスはここではイザゴージェ注解から一步を進めて、個は何ものについても述語されないと云いかえる。個的実体のみ自体的に存立し、いかなる基体をも必要とせず、自らが類・種・特性・付帯性等他のすべてのものの基体としてそれらに個性と存在性を与えろという視点が、イザゴージェ注解よりはるかに明瞭にとり出される。<sup>(21)</sup>

## 3) 命題論注解における個体

しかし、本文がそれを強制しない命題論注解においては、この主語的で非述語的なものという視点はふたたびあいまいとなり、〈individuum〉、〈singulare〉、〈particulare〉（ポエチウスはこれらの間を厳密に区別しない<sup>(22)</sup>）はふたたび「他のものに述語されない」述語として扱われる。ポエチウスにおいては指示する語である固有名詞や「この何々」が確定記述と殆ど区別なしに、すべて「個のターム」として考えられていることは上のイザゴージェ注解の箇所からも推測される。従って述語的タームと主語的ターム、また述語文と同定文の区別は重視されてはいないと思われる。個のタームはすべて述語となりうる。しかしそれはカテゴリー論注解の強調するように、存在の次元でそのタームの指すものが、他のあらゆる述語タームの指すものの存在原理であり個体化原理であることを妨げない。また個のタームの指すものの特性が、他と非共通的であることを妨げない。命題論注解は個体の特性についてある新しい表現を導入した。それは〈Platonitas〉という語である。「プラトン」というタームがプラトンである個体以外の何ものにも述語されない理由は、プラトンという個体の性質が唯一単独的だからである。それに反し多なるものに述語されるタームの指すものは、多なるものに共通する性質を持つ、たとえば〈humanitas〉の如くに。人が *humanitas* によって人であるごとく、プラトンは *Platonitas* によってプラトンであり、これはプラトンの非共通的特質である。「プラトン」は唯一にして特定の実体と特質とを示すタームであり、*Platonitas* がその特質である<sup>(23)</sup>。この用語についてはこれ以上の説明がないので、種々の疑問に道を開く。a) *Platonitas* とはプラトンの多くの性質のうち、他と共通しないただ一つの性質なのか、そうだとすればいかなる性質か、b) 非共通的な多くの性質があって、そのそれぞれが *Platonitas* なのか、c) プラトンの持つ性質のうち、ある一部のグループが *Platonitas* なのか、そうとすればいかなるグループか、d) プラトンの持つ全性質を指すのか、だとすれば、それが他と共通しないという保証はどこにあるのか、等々。たとえば現代では Plantinga が b) の解釈をとり、その

〈Platonitas〉の各々を individual essence と呼び、これらは認識的には等価でないとしても論理的には代入可能で等価であることを指摘する。伝統的用語に直せば付帯性による個体化説に近く、その付帯性の各々が個の本質・Platonitas と呼ばれるわけである。これは Frege, Russell の線上の、固有名詞の意味についての一つの考え方として面白い。しかしボエチウスの論理学は伝統的な存在把握と密接に結びついているから、上のように付帯性の一つ一つをプラトン性<sup>(24)</sup>と等価におくことをボエチウスが考えていたとは思えない。Roland-Gosselin<sup>(25)</sup>は Platonitas を実体的特性と解し、Schurr はそれに反対して付帯性の集合と考える<sup>(26)</sup>。ボエチウス自身の考えはしかし、恐らく d) に近いものではなかったかと思われる。つまりプラトンに属する実体的・付帯的全性質の集合である。彼が proprietas と proprietates をかなり任意的に使い、またイザゴージェ本文の翻訳において個が〈ex proprietatibus consistit ..... quarum collectio numquam in alio quolibet eadem sit〉<sup>(27)</sup>と云っていることからそれが推測される。これについて、最も詳細かつ妥当と思われる注解をしているのは12世紀の Gilbertus Porretanus<sup>(28)</sup>である。Gilbertus は存在を id quo est aliquid (いわば形相的なるもの)と quod eo est aliquid (その形相によってそのものたる存在)とに分析する。彼に云わせると quod est aliquid なるものの個性 singularitas は id quo の個性 singularitas から結果する。Gilbertus は徹底的な形相主義者である(この点で、実はボエチウスとは異なると思われる)。彼はボエチウスより進んで、singularitas と individualitas を区別する。singularitas は殆ど説明不能な、存在と置換可能な究極的一性の如くである。何かの形で存在するものは何であれ singularis<sup>(29)</sup>なのである。そして形相の存在性・一性が、あらゆる現実存在性の存在性・一性の基礎である。id quo はしかし、種・類形相にみられるように、individuale でなく、dividuale であることが多い。dividuale とは相似な多くのものに共通的たりうること、individuale とは他と非共通的・非相似的なることである。彼は id quo を分類し、I 単純な id quo (例えば rationalitas, albedo) II 複合的 id quo に分け、後者を更に a) 個体に属する id quos の一部分の集

合 (例えば *humanitas*) b) その全部の集合 (例えば *Platonitas*) に分ける。即ち *Platonitas* は、プラトンという個体について現実にも可能的にも、かつて在り、今あり、未来にあるだろうすべての性質の集合体である。そして上の諸種の *id quos* のうち、これのみが *individuale* で他のものは *singulare* ではあるが *dividuale* である。これはライブニッツの個体概念に似ている。

Gilbertus においては、現実存在 *quod* (彼は *subsistens* と呼ぶ) は形相的存在 *quo* (*subsistentia*) によって完全に形成され規定される。しかし、ボエチウスにおいては、上掲のテキストにおいて *proprietas* と *substantia* を分け、*Platonitas* をも、*humanitas* をも、明瞭に *qualitas*, *proprietas* と云うことから、カテゴリー論注解の考え方がここに生き、*humanitas*, *Platonitas* で尽しえない基体的なものが積極的に考えられているとは云えないであろうか。論理的にも存在的にも、質の、特性の、荷い手となる何物かが。しかしもしそのようなものが考えられていれば、これはカテゴリー論の第一実体ではない。Platon の内で *Platonitas* を荷うものであるわけだから、それはいかなる性質をも、規定をも持たない裸の基体のはずである。それを質料と呼ぶこともできよう。しかし、Schurr や Otto がそう解釈するように、<sup>(30)</sup> 論理学書においてはその論理学という性格上、また注解であるという性格上、ほの見えてはいても主題とはならなかった存在論を、正面から扱ったのが第 V 論文であり第 III 論文 (*De Hebdomadibus* と通称される) であるとすれば、そこで基体としてあらわれて来るものは神のペルソナにもあてはまるものであり、形相的规定を受けとる以前に、ある積極的存在性を持ち、むしろその受けるすべての形相的存在を存在たらしめると解しうるものである。たしかに、*Platonitas* があらゆる規定を含む以上、その荷い手は全く無規定の純粋基体である。しかしそれには第 V 論文でも第 III 論文でも、質料の名は与えられない。それはむしろ、その荷う一切の形相・性質の個化・存在化の原理として考えられているのではないか。*Platonitas* の成分をなす、自体 *dividuale* な諸形相を存在化・個化するものではないか。ボエチウスのキリスト教的・ネオプラトニスム的思考にあっては、無規定性・無

限定性は、すなわちデュナミスは、文字通り源泉的な力なのではないか。<sup>(31)</sup>これらの点を、第V、第III論文について検討してみよう。

## 2

まず、第V論文第三章のペルソナ概念であるが、これの存在論的構造については、諸研究者の解釈にもあるあいまいさがつきまとっているように思える。これは部分的には *natura* (φύσις), *substantia* (ὕποστασις, οὐσία) 等の、多様な歴史を持つ語の宿命的な多義性から来る。教義論争の時代は特にこの多義性が混乱をひきおこした時代であり、ポエチウス自身のこの論文の意図も、当時のビザンツ・スコラ学の人々のそれと同様、この用語の混乱を整理し、あいまいさを拭き去り、カルケドンのキリスト論を可能にするような概念規定を確立しようというものであったが、それにもかかわらずポエチウス自身が語をかなり多義に用いており、現代に至るまでその解釈にあいまいさを残していることは、問題の錯綜性をよく物語っている。部分的には、この多義性は、ネオカルケドニスムと呼ばれる調停的な人々の戦略と同じく、<sup>(32)</sup>意図的に、異なる考え方を一つの定式の内にまとめるために用いられているとも考えられるし、また第III論文において成功しているように、流動的な現実の、異なりながらも共通性を保つ諸相の連続性を、表現するのに用いられているとも考えられる。

しかしそれにもかかわらず、私は諸研究の解釈を参照しながら、一つの比較的単純に筋を通せる解釈を、あえて試みてみたいと思う。手がかりとしてまず Schurr の解釈を見よう。前にも述べたように、Schurr はこのペルソナ定義をポエチウス存在論の中心と見ており、かつこの定義の中心をなすのは個の概念だと云う。私もこの点は異存ない。しかし Schurr はこの定義が結局不正確だと云う。その論点は次のように整理できよう。1) この定義の云う *substantia* は、個化された *natura* (ソクラテスの人間性) といったものを意味するのではなく、個体存在そのものである。2) *natura* と云われているのは、共通本性・種形相である。3) しかるに、ある個体は当然種を分有することによって



個であり、種と個は分ちがたい一性をなしている。ボエチウスにおいても *natura* と *persona* の区別は単に論理的な区別でリアルには両者は区別ない。

4) とするとこの定義によればキリストの内には二ペルソナがあり、三位の神は四位となってしまうだろう。<sup>(33)</sup>

しかしまさしくこれらの困難は、カルケドン後の思想家たちを悩ました困難である。Schurr もそうするように、種形相によって個の個としての存在が成立するというプラトン・アリストテレス的な考えをとるかぎり、キリスト両性説は語ることさえも出来ない。そこでカルケドン後の思想家たちは *οὐσία* とは何か、*φύσις* とは何か、*ὑπόστασις* とは何か、*φύσις* と *ὑπόστασις* の関係はどうなっているのか、という問いを論じつづけていたのである。そして当時のカルケドン正統派のもち出した解決は、ボエチウスの第V論文に見られるような、*natura* (*φύσις*) の特異な意味づけであり、ビザンツの Leontios の *ἑνωπόστατον* という概念である。この二つは殆ど同義であると考えられる。Schurr はボエチウスの *natura* 概念の解釈にさいし、トマス等のちのスコラの解釈を視野において、この点を見落としているのではあるまいか。

ボエチウスにはほぼ同時代の穏和な単性説者アンチオキアの Severos と、「ネオカルケドニスム」とされる Johannes Grammatikos の論争も、同じ問題をめぐっている。<sup>(34)</sup> いずれもヘノティコンに近く、アレクサンドリアの Cyrillos に近い思想家ながら、反カルケドンと親カルケドンに分かれる。Johannes Grammatikos の功績は、はじめて三位一体論の用語とキリスト論の用語の統一を意図したこととされる。彼はカパドキアの教父たちの三位一体論に依拠して、*φύσις* を共通本性 *οὐσία κοινή* であるとした。それに反対し、Severos は Athanasios に依拠して *οὐσία* = *φύσις* = *ὑπόστασις* であるとする。これらはすべて、<sup>(35)</sup> 現実の存在者を指す言葉であり、同義語である。異義であるのは、指示の仕方のアスペクトが違うのみで、*οὐσία* は主として具体的に多なるものの内に存在する共通者として見られたかぎりのそのもの、*ὑπόστασις*, *πρόσωπον* は個別的なものとして見られたもの、*φύσις*, *ἐπαφῆσις* は両方の意味が可能である。<sup>(36)</sup> この

*φύσις* の両義性を、Severos は三位一体論とキリスト論で使いわけたようである。つまりキリスト論では *ὑπόστασις* と同義な *φύσις* を、三位一体論では共通者を意味する *φύσις* を<sup>(37)</sup> すると当然のことながらカルケドンはネストリアニスムだということになる。Severos は *ὑπόστασις* でない *φύσις* はありえぬということから、キリストの人性は *φύσις* ではないと明言する。*μία φύσις τοῦ θεοῦ λόγου σεσαρκωμένη* というのが Cyrillos に依拠する Severos の定式である<sup>(38)</sup>。しかし、三位一体論はこの *ὑπόστασις*-*φύσις* 同義説では成り立たない。Severos 風の説の弱点は、なぜキリスト論と三位一体論とで *φύσις* の異なる語義を用いるかの説明が十分つかないことであろう。それに対し、Johannes Grammatikos は両論に同術語を用いることを試み、*ὑπόστασις* は共通者なる *οὐσία=φύσις* とは明瞭に区別され *τὸ καθ' ἑκάστων* と定義づけられた<sup>(39)</sup>。しかし、彼はその際、「*φύσις* が共通者なら全三位が受肉せねばならなくなる」という Severos の反論に対して十分な答えをなしえていないことが指摘される<sup>(40)</sup>。Severos はキリストの人性が *φύσις* ではないとしつつも、アポリナリズムに墮さぬためキリストにおける人性の現実性は守ろうとする。この困難から、Severos はカルケドン信条にも登場する語である、特性 *ιδιότης*, *ἴδιον* 等に関する考察を深めた<sup>(41)</sup>。すでに Cyrillos の語る *φύσις* について、人性は特性・性質の集合であるという解釈もあるらしい<sup>(42)</sup>。Severos はある箇所<sup>(42)</sup>で特性を分類して、a) 個別的基体自身、b) 基体存在を構成し決定する基本的・実体的なる特質、とし、この b) を *ιδιότης ὡς ἐν ποιότητι φυσικῇ* とよび、キリストの内に二種あることをみとめる。彼はここにキリストの「非混合の二性」の説明を見出すのである。二本性は Severos にとって受け入れがたくとも、神本性と共に、ロゴスなるヒュポスタシスが、人の本質的特性を荷うということは、受け入れうる。それはきわめて本性に近いが、あくまでも性質である。それならば、神である性質と、人である性質が、非混合に並存することの説明になる。これはまた Cyrillos に倣って *ιδιότης φυσική*, *ιδιότης ἢ κατὰ φύσιν*, または種差 *διαφορά* とも呼ばれている。ネストリアニスムを避けるために、これが a) の

いみでの「特性」でないこと、つまり実体的でなく質的なもの *ποιότης* であること、*λόγος τοῦ πως εἶναι* であることが強調される。<sup>(43)</sup>これは、カルケドン論者にもかなり近い解決の仕方である。ビザンツの Leontios は、同じ困難を *ἐνυπόστατον* という概念で解決したが、その *ἐνυπόστατον* とは実体的・本質的性質 *ποιότητες οὐσιώδεις* の如きものであり、これは属性でもなく、独立存在としてのウシアでもない、とされる。<sup>(44)</sup>これは Severos の *ιδιότης φυσική* ときわめて近いものであろう。ただし Leontios は正統カルケドン派として、Severos に反して、*φύσις* と *υπόστασις* を峻別し、そのリアルな区別によって—*υπόστασις* が二 *φύσις*・*οὐσία* を分有しうる、荷いうるという可能性を基礎づけようとした。その荷いのあり方が *ἐνυπόστατον* という仕方なのであろう。当然 Severos は、極端な単性説の人々、Timotheos Ailuros, Philoxenos of Hierapolis, Sergius Grammatikos 等によりキリストを分割するものとして批難されている。

### 3

ボエチウスのペルソナ定義は、まさにこのような論争の渦中にあり、その一環なのだと思われる。彼の説は Johannes Grammatikos, Severos, Leontios のそれぞれと部分的に似ており、特に Leontios にはよく似ているように思われる。ボエチウスは第V論文第I章において〈*natura*〉の定義を試み、第四番目の定義として、「*natura* とは、それぞれの物に形を与える種差である」〈*natura est unam quamque rem informans specifica differentia*〉と云い、この定義に従って、キリストの内に二本性 *naturae* があると云われうるとする。<sup>(45)</sup>すると、神性も人性も、かかるものと解釈してよいわけである。(もとより神性に関しては本来語りがたいのであり、神の内ではすべてが一であり単純であるわけだから、本質と存在、実体と属性という区別は当然成りたつわけもなく、またかりに神においてはずべての属性が実体的に存在すると語っても、その実体が実は超実体である)と云われている。<sup>(46)</sup>またキリストについて類や種を語ることも当然できな

い。ロゴス・ヒュポスタシスと神本質の関係を、個と本質、個と形相のアナロジイで語るのみである。しかしポエチウスは一応その留保をしながら、可能なかぎりアナログな語り方をしようとしているようにみえる。) ところで Schurr はこの natura を species, spezifische Form, essentia, forma substantialis 等と解釈する<sup>(47)</sup>。しかし、〈specifica differentia〉はポエチウスにあっては明瞭に定義された意味を持っている。イザゴージェ注解によればそれは物を単に他様 alter にするのでなく種的に他なるもの aliud にするような差異であり、更にかかる種差は種々に分類されるが、そのうちに、類を分つ差異(区分的種差)と、集まって種を構成する差異(充足的構成的種差)との分類がある。後者は「類から降って類を分つ諸差異が集められ、一つのものに結合されて種を形づくる informare」<sup>(49)</sup>「種の実体を構成する」と説明されている。第V論文第I章の specifica differentia はこの第二の構成的種差と解されるべきだろう。Leontios で ποιότητες ουσιώδεις と呼ばれ、Severos で ιδιότης φυσική, διαφορά 等とよばれたのも、これにきわめて近いものであった。

ところでこの種差は、これも明瞭に、quid として述べられることではなく、quale として述べられることだと規定される。そのかぎりでは proprietas, accidens と同類であるが、内容的には、proprietas は一つの種についてのみ云われる性質、accidens は実体を表示せず基体から可分な性質であるのに対し、種差は実体を表示し、かつ基体から不可離な性質である、という差がある。しかし<sup>(50)</sup>いずれにせよ種差は一つの質 qualitas なのである。これはイザゴージェ注解ではおどろくに当らないが、種差の論理的身分があいまいなことで知られるカテゴリー論の注解ではどうか。ここでも論旨は明瞭である。「種差とは同じ類の下におかれる諸種を固有の質 qualitas によって決定するもの」、人と馬の実体の定義は、「理性的と非理性的という質において」異なる。ゆえに種差は「多くの、種において異なる事物について quale にかんして述語される」<sup>(51)</sup>。ここでポエチウスはアリストテレスをポルフェリオス風に解釈していると云えよう。Gilbertus Porretanus はここでも明晰な注釈をしている。この natura が

現実の個体でもなく、種の実体でも類的実体でも、実体を構成する原理でもなく、<sup>(52)</sup> 類的・種的特性を意味する、と。

以上から見れば、Schurr のように、この種差を *quid* にかんして述語される *species* と等置して考えるのは基本的にまちがっており、そこから彼のポエチウスのペルソナ定義に関する誤った解釈が生まれたと考えられる。*natura* が質的なものと解されれば、一つの基体が、多なる *naturae* を荷うことの不条理性は半減する。これはキリストにおいて多かれ少なかれ神人二性を主張しようとする当時の人々が共通に採った戦術であるように思われる。しかし近代の研究者は大抵このことを無視している。Nédoncelle は *natura* を文字通り *specifica differentia* ととっているが、そのことの意味には殆ど注意を払わず、第三章の *subsistentia* と *substantia* の差に専ら注意を向ける。<sup>(53)</sup> Chadwick はポエチウスが *natura* の四つの定義において、この語が *persona* と異なって実体属性両様の広い意味領域を持つことを示したとするが、キリスト論に関して第三の実体的定義を用いるか第四の属性的定義を用いるかを明らかにしていないとする。<sup>(54)</sup> これはあきらかにまちがいである。

#### 4

ところでポエチウスの上述の第V論文第I章終りの述べ方を見ると、このような *natura* 解釈は、キリストの人性という特殊な場合にのみあてはめられているわけではなく、あらゆる存在に共通の構造と考えられているようにみえる。キリストにおける神性とロゴス・ヒュポスタシスの結びつきに関して、及び他の一般的事物においても、本性と個の結合は不可分一体であって、キリストの人性という特殊な本性のみ、いわば寄留的にロゴス・ヒュポスタシスの内にエンヒュポスタト的に付け加わるという解釈もありうるわけだが、ポエチウスは全く極端なカルケドン派として、両性とヒュポスタシスの関係をいわば対称的に考え、かつそれを存在一般の構造とみなすようにみえる。すると、そこにはどうしても、純粋基体のごときものがあらわれて来る。これが恐らくポエチ

ウスのペルソナ概念の核をなすものであろう。第三章はその基体がどのようなものかを説明すると考えられる。ここでは人間を例にとり、個体存在の持つ四つの存在様式、存在のアスペクト、*οὐσία* = *essentia*, *οὐσίωσις* = *subsistentia*, *ὑπόστασις* = *substantia*, *πρόσωπον* = *persona* が説明される。しかし *substantia* と *persona* の差は、理性的本性の *substantia* であるかないかということであり、存在構造の問題としては重要でない。存在構造の層は三層と考えてよいと思う。*essentia* は「存在するゆえに」とのみ説明される。*subsistentia* と *substantia* の差は、前者がいかなる基体の内にもない自立的存在なることを示し、後者は自立的ならざるものに対して基体となることを示す。<sup>(55)</sup> 云いかえれば *subsistentia* は存在するために付帯性を必要とせず、*substantia* はむしろ、付帯性の基体となって付帯性に存在を与える、という性格を持つ。従って類・種は単に *subsistere* するのみであり、個体は *subsistere* するのみならず、*substare* する。個体が存在するためには、付帯性を必要とせず（付帯性によって個が個となるという説はここで否定されているのではないか?）、諸特性と諸種差によって形づくられて、付帯性に存在を与えるものだから。<sup>(56)</sup> ここで *substantia* が第一実体に似たものであることはわかるが、厳密には現実個体そのものというよりは、それからいわば付帯性を引き去ったもの、付帯性以前の、付帯性の根拠となるものであろう。それにもかかわらず、上の説明から見れば、付帯性が個の個性を与えるのではないと思われるから、それはあるいみで個性をもつものである。つまり付帯性となってあらわれる現実の差異性といういみでの個性を持つのではないが、その根拠をなすものといういみでの個性を持つものと云わねばならないだろう。その個性の根拠は種形相の側から決定されると考えるか、基体の側から与えられると考えるかの二つの考え方がある。Gilbertus Porretanus は前者を主張し、Otto は Leontios 解釈を支えにして後者を主張する。Gilbertus は *subsistens* と彼が呼ぶ現実存在の *singularitas* と数的差は、そのそれぞれの内にある *subsistentia* の *singularitas* と数的差によるとする。即ち *subsistentia* (たとえば *humanitas*) 自身が数的に多でありそれぞれ *singulare* たりえ、それ

が各現実存在を *singulare* で数的に多ならしめると考える。<sup>(57)</sup> Otto はボエチウスが Leontios と同様、本性とヒュポスタシスをレアルに区別し、後者を純粋自立個体として考えているとする。<sup>(58)</sup>

ボエチウスの *subsistentia* についても疑問は多い。それは *natura* のような、個のレアルな構成成分たる性質ではない。*subsistere* するものとして類種を例としてあげてあるが、単に論理的なものか、存在として見られているのか。存在であるとして個体存在を離れて自存しているとみなされるのか、個体存在の内に存在を持つと考えられるべきなのか。もし両存在様態があるとすれば、両者の関係はどう考えられるべきか。神学論文集の範囲では、こうした疑問に答える手がかりは余りに少ない。『哲学の慰め』の内には一種のイデア界のようなものが考えられているらしい箇所や、それが神の内におかれているらしい箇所も見出されるが。<sup>(59)</sup>

存在構造について眼をひくことは、ボエチウスが、さきに述べた裸の基体的なものには名を与えていないとみえることである。「すでに種差によって形を与えられたもの」が *substantia* と呼ばれるのであり、基体が本性なしに存在するということは事実いかなる場合にもありえないのだから、名づける必要もないのであろうか。逆に、本性がいわば独自の基体なしに在るということは、キリストの人性の場合にありえたのであるが。<sup>(60)</sup> いったいその純粋基体的なものは、どのように考えられているのだろうか。

## 5

その構造は、第Ⅲ論文を参照することによって少し明瞭さを増すように思われる。多くの点で周到な Schurr は、すでに第Ⅴ論文第Ⅲ章の記述と第Ⅲ論文 (*Quomodo substantiae in eo quod sint bonae sint cum non sint substantialia bona*) 特に第2 Axiom との類似・並行性に言及している。<sup>(61)</sup> 第Ⅲ論文は著者自身が標榜しているように、第Ⅴ論文以上に言葉少なくあいまいなもので、多くの解釈可能性のあることは、種々の注釈書・研究書が示すとおりである。しかしこの





essendi forma はいずれも知性によって抽象された、自体的に見られた形相であり、しかし現実には物の内に存在することが指摘され、かつこれはウシアなる範型的形相の似姿とされる。第3、第4 Axiom はその実体形相によって形成されたものが、実体形相に可能的なる付帯性を持ちうることの説明と解される。その場合、subsistentia 自体は、自らの内に更に原理的なものを持つ基体ではないので、その原理的なものに可能的に付随するものを持つことはない。つまり何かを分有することはありえない、と説明される。<sup>(63)</sup>第6 Axiom については、第2—第4 Axiom で説明された ipsum esse (実体形相) の分有と、何か他のもの(付帯性)の分有とが、一つのもの、つまり id quod est esse からもたらされることを語り、すべての具体的存在 quod est はそれによって何か或るもの aliquid になるためにはなく、単に存在するために id quod est esse を分有し、かつその同じものに依って「何か他のもの」を分有し、それによって aliquid になる、と説明される。<sup>(64)</sup>つまり Gilbertus にあっては、id quod est esse を ipsum esse と一応区別することにより存在の分有と本質の分有も一応区別はされているが、しかし両者の分有が同じ一つの分有の二面であるようにみなされている。彼は id quod est esse をウシアとは呼ばず、範型的アイデアを考えてそれをウシアと呼んでいるが、結局のところ、その範型的アイデアは id quod est esse なる第一原理のもとにあると考えられる。

これに対し Thomas Aquinas の解釈は、少なくとも『Hebdomadibus 注解』においては、この第6 Axiom について異なっており、id quod est esse をも〈esse simpliciter〉すなわち実体形相と解する。つまり第6 Axiom と第3 Axiom 後半とを殆ど同義と考え、id quod est esse と ipsum esse の間に区別をみとめない。<sup>(65)</sup>しかも彼は第1—第6 Axiom をすべて単に論理的考察ととり、従ってここでの id quod est esse の分有の、他の分有への「先性」も存在的ではなく知の秩序と解している。G. Schrimpf はそれに対し、Gilbertus 同様これらを形而上学的考察と理解し、ポエチウスにおける存在論と論理の不可分性を指摘する。<sup>(66)</sup>Schrimpf の解釈は詳細なもので、ほぼ同義的な esse—ipsum esse—

essendi forma, また id quod est—substantia, あるいは ipsum esse 自身の「ipsum」の二義性等の微妙なアスペクトの差の分析を試みている。これらの微妙な差の連続した流れを辿ると、ポエチウスが少しづつずれる同義的・相似的な用語を用いて、本質存在と現実存在, 自存離在する形相と内在形相, 原理と原理から生じたもの, 等の間<sup>(67)</sup>の不即不離の流動的・連続的關係を巧みに語っていると解されて興味深い。Chadwick も指摘するように, ここにはプロクロスの影響が色濃いと思われる。Schripf も ipsum esse をプロクロスの *αὐτοεἶναι* と対比し, id quod est esse はポエチウスにおいて, 低次の *αὐτοεἶναι* の源なる第一存在として ipsum esse から区別されており, トマスの注解はその点を見逃しているとする。<sup>(68)</sup>つまり Schripf は Gilbertus よりやや明瞭にこの二つを段階的に区別する。

存在の各段階をこのように流動的・ダイナミックなものとして解するとき (ポエチウスも participatio, susceptio のほか defluere, fluere 等を諸存在階層の間に用いている。後者は主に第一原理との関係である)<sup>(69)</sup>, 論理的により「一般的」「抽象的」「無限定的」なタームで語られるものが, より根源的に全リアリティを含むものであることになる。現実存在を構成するこの流動・分有の第一の段階が第6公理で語られる「存在するための id quod est esse の分有」である。これは第V論文で「est atque maxime ipse est a quo omnium esse proficiscitur」と云われる神である *οὐσία*=essentia からの, 「quoniam est」と云われた, 人の持つ *essentia* の流出, 分有ではないか。それが実体形相的規定・付帯的規定の基礎・前提条件となる。essentia は subsistentia の核でもあり, substantia=persona の核でもある。あるいはまたそれらを覆い包むものと云ってもよい。分化と限定の根源なるもの, そのいみで nondum est なるもの, あらゆる限定を超えるものが, 最も実在的・最も活動的なものだというのは, ユダヤ・キリスト教とネオプラトニズムに共通の直観である。キリストという存在は更にその原理の深淵をそのままこの世界の内へともたらしたが, それと類比的にあらゆる人間存在・個的存在の底にもこの根源とのかかわりが開けて見えてきたの

ではあるまいか。第6 Axiom に語られる第一の分有が、個なる人間存在の核をなす。つまり「純粹基体」は実は第一原理との結びつき・関係・分有以外の何物でもないのではあるまいか。substantia の核は、実はたえま<sup>(70)</sup>ない第一原理からの流出、それとの関わり、にほかならないのではないか。

こう解することが許されるなら、「純粹基体」は全く受動的な無にひとしいもの、形相的限定によってはじめて存在性を得るものではなく、むしろあらゆる限定に存在を与える原理的なものとなる。ただしその原理性・存在性は第一原理とそのものの一対一の関わりにおいて成立するものであるが。無限定な「ある」というだけのかかわりが、どうして個的なものでありうるのか、どのようにして *essentia* が個の存在性でありうるのか、それがこの解釈の最も問題のなところであろう。Otto が指摘するような、ポエチウスのプロチノスとマリウス・ヴィクトリヌスとへの関係の追究がその答えをいくらか明らかにするかもしれない。神学論文集の範囲には、その答えは見出せないように思う。しかし Gilbertus 風の、形相による個性の説明も、また質料による個体化の説明も、理論的には同程度の困難を持っている。ひとつ確実なのは、それらそれぞれのセオリイがそれぞれ別々の世界理解・人間理解・自己理解を含意するということであり、存在のどの要素に根源性・優位性をみとめるかということが、宗教的・倫理的志向の図示でもあり、主張でもあることである。その点からいえばこの解釈はいわば人間を人間の枠から自由にする要素を持っている。人間の最も根源的なものが、善なる第一原理との端的な関わりであり、人間性という形相・性質は存在論的に人間個体と、もはやアリストテリスムにおけるほどの緊密な不可分性を持っていない。だがそれを可分だといいきることもできない。persona—substantia はつねに *natura* を負ってはいるのだから。確かに、人間性と人間個体の結びつきは、他の付帯性と人間とのむすびつき以前の、その基礎をなすものではある。しかし、persona—substantia のいわば核と、人間性の間には、この存在論では、それ以前になかったある切断が生じていることは、これまでの叙述であきらかであろう。これがキリスト教存在論の特徴なの

ではなかろうか。そしてこの切断は、多分ネオプラトニズムと密接にかかわりながら、しかしカルケドンの挑戦によって、はじめて明確に姿をあらわしたのではなかろうか。この含意するところは、少し無用心に誇張して言えば、いわば人間の実存の神性であり、あらゆる限定的なものからの自由、限定的なものの（「人間本性」さえもの）相対化である。また Nédoncelle がこのペルソナ概念について批難した、*persona* が *substantia* として閉じたモナドになるということ<sup>(71)</sup>は、当たらないと思われる。*substantia—ὁπόστασις* の存在性は、第一原理との関わりの内にもみ存するのだから。

最後に、付帯性に関して一つ付言しておきたいことは、付帯性によって、個が個化するとは解されないまでも、第V論文においてさえも、付帯性の扱いにきわめて重きがおかれていることである。*subsistentia* と *substantia* の差は、付帯性を荷うか否かにおいて見られ、*substantia* の持つ現実存在性の発現は、まさに「付帯性を存在せしめる」ということにおいて見られている<sup>(72)</sup>。つまり最も深い、第一原理との結びつき、そのかけがえのない唯一性が、眼に見える形をとったものが付帯性なのである。本質的性質と付帯性の関係は構造的にはアリストテレスの存在論と異ならないわけであるが、その評価・照明のあて方は、そこに一つ個的存在の核が加わったことによってかくも変化している。これは屢々指摘されるように、<sup>(73)</sup>歴史的存在性を重大視するキリスト教的直観の存在論的表現でもあろう。

### 註

- (1) 『哲学の慰め』については、神学論文との内容・意図の整合性について多くの議論があるので、この論文では神学論文集と論理学書をもとにして論ずることにした。
- (2) *at hominis dicimus esse personam, dicimus dei, dicimus angeli. Tr V, cap. II, l. 36 sq.* Stewart, Rand, Tester (ed. & transl.), *BOETHIUS. Tractates, De consolatione philosophiae*, Loeb Classical Library, 1973. テキストは、神学論文については上記 Loeb を用い、Isagoge 注解については S. Brandt 編のもの (CSEL, vol. 48), カテゴリー論注解, 命題論注解は Migne, *PL* vol. 64 を用いた。
- (3) *Tr V, cap. III, l. 28 sq.*

- (4) *Conc. Chalcedonense* 451... ἐνα καὶ τὸν αὐτὸν Χριστὸν υἷὸν κύριον μονογενῆ ἐν δύο φύσεσιν ἀσυγχύτως, ἀτρέπτως, ἀδιαιρέτως, ἀχωρίστως γνωριζόμενον, οὐδαμοῦ τῆς τῶν φύσεων διαφορᾶς ἀνηρημένης διὰ τὴν ἔνωσιν, σωζομένης δὲ μᾶλλον τῆς ἰδιότητος ἑκατέρας φύσεως, καὶ εἰς ἓν πρόσωπον καὶ μίαν ὑπόστασιν συντρεχούσης, (unum eundemque Christum Filium Dominum unigenitum, in duabus naturis inconfuse, immutabiliter, indivise, inseparabiliter agnoscendum, nusquam sublata differentia naturarum propter unionem magisque salva proprietate utriusque naturae, et in unam personam atque subsistentiam concurrente,)...
- ...
- (5) カルケドン定式の直接の哲学的背景はいまだ明らかでない。Ch. Moeller はアンチオキア派の Mopsuestia の Theodor がカルケドン以前に同じ定式を用いていることを指摘し (Le chalcédonisme et le néo-chalcédonisme en Orient de 451 à la fin du VI<sup>e</sup> siècle, in: *Chalcedon I*, Würzburg 1951, p. 643) E. L. Fortin はこの定式がネオプラトニスム的混合論に基づくことを論証している (The definitio fidei of Chalcedon & its philosophical sources, *Studia Patristica V*, Berlin 1962. また *Christianisme et culture philosophique au cinquième siècle*, Paris 1959. がこの問題を詳しく扱っている)。この混合論については本誌25号の野町啓氏の論文にくわしいので参照されたい。
- (6) cf. A. Grillmeier, “piscatorie” — “aristotelice”, in: *Mit Ihm und in Ihm*, Freiburg 1978.
- (7) B. E. Daley, Boethius’ Theological Tracts and Early Byzantine Scholasticism, in: *Mediaeval Studies* 46 (1984), p. 173.
- (8) Ch. Moeller, *op. cit.* p. 638 sq.
- (9) B. E. Daley, *op. cit.* p. 164 sq.
- (10) ポルフェリオスの影響は、特に J. Bidez, Boèce et Porphyre, in: *Revue belge de philologie et d’histoire* 2 (1929) において強調され、その後、P. Courcelle は *Les lettres grecques en Occident* (Paris 1943) その他において、アムモニオスの顕著な影響を論証し、ボエチウス自身アレクサンドリアに学んでアムモニオスの講義を聞いたと推定している。J. Shiel はこれに反論し、イザゴージェ、カテゴリー論、命題論の注解において、ボエチウスはあるギリシャ語の欄外注解をもつテキストを単に翻訳したのみだという説をたてている (Boethius’ Commentaries on Aristotle, in: *Mediaeval and Renaissance Studies* 4, 1958)。L. M. Rijk はこれに全面的に賛成するが (On the Chronology of Boethius’ Works on Logic, in: *Vivarium* 2, 1964)、H. Chadwick はこの説にはかなり疑いを持ち、またアムモニオスを強調しすぎる Courcelle に対しても批判的で、ポルフェリオスのほか少なくともイッ

ムブリコスをも直接の資料として持っていたらうとする (Boethius, Oxford 1981, 特に pp. 129—131)。

- (11) M. Nédoncelle, Les variations de Boèce sur la personne, in: *Revue des sciences religieuses* 29 (1955).
- (12) 最も新しい詳細な年代研究は L. M. Rijk の上掲書である。それに従えば、イザゴージェー注解 I が 504~505 年, II が 507~509 年, カテゴリー論注解が 509~511 年, 命題論注解 I は 513 年以前ではなく, II は 515~516 年であるとされる。他方, 神学論文集の年代は, 第 V 論文が 512 年以降であることがその内容から確実であり, Schurr の古典的な業績によって第 I 論文は 519 年以後とされる (V. Schurr, *Die Trinitätslehre des Boethius im Lichte der "Skythischen Kontroversen"*, Paderborn 1935)。多くの学者はこれに従うが, Nédoncelle は第 I 論文を第 V 論文より前におく (*op. cit.* p. 236)。いずれにせよここで中心となる第 V 論文は, ほぼ命題論注解と同時代であり, イザゴージェー注解およびカテゴリー論注解の結果をもふまえていると考えられる。
- (13) *In Isag.* I, p. 47 (PL 64, 29). individua autem vocamus quae in nullas species neque in aliquas iam alias partes dividi possunt, ut est. Cato vel Plato vel Cicero et quicquid hominum singulorum est; ..... hominem vero ipsum singulum, id est Ciceronem, in nullos alios distribuere possumus atque ideo ἄτομον, id est individuum, vocitatum est.
- op. cit.* I, p. 49 (PL 64, 30). individua vero quoniam sub se nihil habent ubi secari distribuique possint, ad nihil aliud praedicantur nisi ad se ipsa, quae singula atque una sunt.
- (14) *In Isag.* II, p. 195 (PL 64, 97—98). individuum autem pluribus dicitur modis. dicitur individuum quod omnino secari non potest, ut unitas vel mens; dicitur individuum quod ob soliditatem dividi nequit, ut adamans; dicitur individuum cuius praedicatio in reliqua similia non convenit, ut Socrates.
- (15) *In Isag.* I, pp. 81—82 (PL 64, 47—48). natura autem individuorum haec est, quod proprietates individuorum in solis singulis individuis constant et in nullis aliis transferuntur atque ideo de nullis aliis praedicantur. Ciceronis enim proprietas cuiuslibet modi fuerit, neque in Catonem neque in Brutum neque in Catulum aliquando convenit.
- (16) *In Isag.* II, pp. 235—236 (PL 64, 114). at vero individuorum proprietas nulli communis est. Socratis enim proprietas, si fuit calvus, simus, propenso alvo ceterisque corporis lineamentis aut morum institutione aut forma vocis, non conveniebat in alterum; hae enim proprietates quae ex accidentibus ei obvenerunt

- rant eiusque formam figuramque coniunxerant, in nullum alium conveniebant.
- (17) *In Isag.* II, pp. 183 sq. (*PL* 64, 92—93). omnium, inquit, quae praedicantur, alia de singularitate, alia de pluralitate dicuntur. de singularitate vero, inquit, praedicantur quaecumque unum quodlibet habent subiectum de quo dici possint, ut ea quibus singula subiecta sunt individua, ut Socrates, Plato, ut hoc album quod in hac proposita nive est, ut hoc scamnum in quo nunc sedemus.
- (18) *In Isag.* II, pp. 233—234 (*PL* 64, 113—114). individua enim maxime ostenduntur, si vel tacito nomine sensui ipsi oculorum digito tactive monstrantur, vel ex aliquo accidenti significantur vel nomine proprio, si solus illud adeptus est nomen, vel ex parentibus, si illorum est unicus filius, vel ex quolibet alio accidenti singularitas demonstratur, eo quod ad esse unam praedicationem habeat eiusque dictio non transeat ad alterum, sicut generis quidem ad species, specierum vero ad individua.
- (19) S. Otto のビザンツのレオンチウスにかんする叙述参照。Otto, *Person und Subsistenz*, München 1968, p. 46.
- (20) *In Isag.* II, pp. 185 sq. (*PL* 64, 93). —Socrates enim animal est—, ipsum animal fit individuum, quoniam Socrates est individuus ac singularis. item homo de pluribus quidem hominibus praedicatur, sed si illam humanitatem quae in Socrate est individuo consideremus, fit individua, quoniam Socrates ipse individuus est ac singularis. item differentia ut rationale de pluribus dici potest, sed in Socrate individua est. risibile etiam cum de pluribus hominibus praedicetur, in Socrate fit unicum. communiter quoque accidens, ut album, cum de pluribus dici possit, in uno quoque singulari perspectum individuum est.
- (21) *In Cat.* *PL* 64, 169—171. cum vero dico Socrates vel Plato, rem dixi particularem; quoniam Socrates de nudo [nullo?] subiecto dicitur: et accidens quoque eodem modo; nam cum dixero scientiam, rem protuli universalem, idcirco quod scientia et de grammatica et de rhetorica, et de aliis omnibus sub se positis praedicatur; si vero dixero Platonis scientiam, quoniam omne accidens quod individua venit individuum fit, particularem scientiam dico, namque Platonis scientia, sicut ipse Plato, particularis est. *ibid.* 182—183. Maxime autem substantia prima dicitur, idcirco quod quae maxime subiecta est rebus aliis, ea maxime substantia dici potest: maxime autem subiecta est prima substantia; omnia enim de primis substantiis dicuntur, aut primis substantiis insunt, ut genera et species: namque et genera et species praedicantur de propriis individuis, ut animal atque homo praedicantur de Socrate, id est

secundae substantiae de primis: sin vero sint accidentia, in primis substantiis principaliter sunt. Quare quoniam et accidentia in primis substantiis principaliter sunt, et secundae substantiae de primis substantiis praedicantur, primae substantiae secundis substantiis accidentibusque subiectae sunt. *ibid.* 185. Praedicantur autem secundae substantiae de primis, ergo ut secundae substantiae sint, praedicatio de primis substantiis causa est.

- (22) J. Gracia, *Introduction to the Problem of Individuation in the Early Middle Ages*, München-Wien 1984, pp. 70—111.
- (23) *De Int.* II. PL 64, 462—464. Videmus namque alias esse in rebus huiusmodi qualitates, quae in aliam convenire non possunt, nisi in unam quamcumque particularem singularemque substantiam: alia est enim qualitas singularis, ut Platonis vel Socratis, alia est quae communicata cum pluribus totam se singulis et omnibus praebet, ut est ipsa humanitas. Est enim quaedam huiusmodi qualitas, quae et in singulis tota sit, et in omnibus tota ..... Unde fit ut haec quidem sit communis omnibus, illa vero prior incommunicabilis quidem cunctis, unitamen propria. Nam si nomen fingere liceret, illam singularem quamdam qualitatem et incommunicabilem alicui alii subsistentiae suo ficto nomine nuparem, ut clarior fieret forma propositi. Age enim incommunicabilis Platonis illa proprietas Platonitas appelletur, eo enim modo qualitatem hanc Platonitatem ficto vocabulo nuncupare possumus, quomodo hominis qualitatem dicimus humanitatem, haec ergo Platonitas solius unius est hominis, et hoc non cuiuslibet, sed solius Platonis; humanitas vero et Platonis et caeterorum quicumque hoc vocabulo continentur. Unde fit ut quoniam Platonitas in unum convenit Platonem, audientis animus Platonis vocabulum ad unam personam unamque particularem substantiam referat cum autem audit hominem, ad plures ..... igitur ..... homo quidem dicitur universale quiddam, ipsa vero Platonitas et Plato particulare.
- (24) A. Plantinga, The Boethian Compromise, in: *American Philosophical Quarterly* 15 (1978).
- (25) M.-D. Roland-Gosselin, *Le "de Ente et Essentia" de S. Thomas d'Aquin*, Paris 1948, pp. 56 sq.
- (26) V. Schurr, *op. cit.*, p. 54, 注92.
- (27) *In Isag.* II, p. 235. (PL 64, 114B).
- (28) N. Häring (ed.), *The Commentaries on Boethius by Gilbert of Poitiers*, Toronto 1966, p. 143, l. 53 — p. 144, l. 78. (H 143, 53 等と略記) PL 64,



1293—1294. ただしこれは第一神学論文への注解の内にある。

- (29) *H* 270, 73. quidquid enim est, singulare est. *H* 300, 69—70. quod enim non est unum, nec esse omnino potest: sicut etiam quod non est, non est unum.
- (30) V. Schurr, *op. cit.*, p. 22 sq.; S. Otto, *op. cit.*, pp. 23, 171—179.
- (31) この最後の点については後述 5 節, 特に 64 ページ以下を参照されたい。
- (32) ネオカルケドニスムの戦略については, たとえば Otto (*op. cit.*) の Leontios of Jerusalem の記述を参照されたい。
- (33) Schurr, *op. cit.*, pp. 50—67.
- (34) これについては Ch. Moeller, *op. cit.*; H. G. Beck, *Kirche und Theologische Literatur im Byzantinischen Reich*, München 1959; J. Lebon, La christologie du Monophysisme syrien, in: *Chalcedon I*, Würzburg 1951, pp. 425—580 に依る。
- (35) *Ctr. Grammaticum* 2, 3, 26, 33 etc. (Lebon, *op. cit.*, p. 455)
- (36) *Ctr. Grammaticum*, 2, 33. (Lebon, *op. cit.*, p. 459)
- (37) Lebon, *op. cit.*, p. 461.
- (38) Philalèthe, éd. Sanda, 36. (Lebon, *op. cit.*, p. 466)
- (39) *PG* 86, 2945 BC. これはアレクサンドリアの Enlogios の書とされていたが, Ch. Moeller により Johannes Grammatikos のものとされた。cf. Ch. Moeller, Trois fragments grecs de l'Apologie de Jean le Grammarien pour le concile de Chalcedon, in: *Rev. Hist. Eccl.* 46 (1951), pp. 683—688.
- (40) *PG* 86, 2944D, Severos, *Ctr. Gramm.* CSCO, syr. ser. 4, t. 4, pq 119, 23. cf. Moeller, Chalcedonisme ....., p. 698; Beck, *op. cit.*, p. 285.; Otto, *op. cit.*, p. 19, 25 sq.
- (41) Lebon, *op. cit.*, p. 534 sqq.
- (42) J. A. Dorner, *Person Christi*, 1853, p. 76 sq. その他 F. Loofs, A. v. Harnack 等, しかし Lebon はそれをみとめない(*op. cit.*, p. 516 sq.)。
- (43) *Ep. 2 ad Sergius*, éd. Lebon, 105; *Ep. ad Oecumen*, éd. E. W. Brooks, Collection of Letters 4/5; *Ep. 1 ad Sergium*, éd. Lebon, 54—59.
- (44) Leontios of Byzanz, *Adversus Nestorianos et Eutychianos*, lib. 1. *PG*, 1277D.
- (45) *op. cit.*, l. 57—63.
- (46) Boethius, *De Trinitate*, c. IV.
- (47) Schurr, *op. cit.*, p. 18.
- (48) *In Isag.* II, pp. 244 sq. (*PL* 64, 118 sq.)
- (49) *In Isag.* II, pp. 253—262. (*PL* 64, 115—119)
- (50) *In Isag.* II, p. 266. (*PL* 64, 121)

- (51) *In Cat., PL 64, 177.*
- (52) *H p. 261. ....non subsistens corporeum.....! non ipsam, que ex genere et differentia constat, subsistentiam specialem.....: non generalem.....: non aliquod eorum ..... accidentium: non denique horum aliquod eternum principium ..... sed potius nature nomine monstrare cupientes rerum, ..... vel generum ipsorum atque specierum substantialem proprietatem. .... Hec enim neque subsistens est neque genus neque species neque accidens neque cuiuslibet horum eternum principium. Sed potius specierum, ..... vel generis..... est substantialis proprietas.*
- (53) Nédoncelle, *op. cit.*, p. 216.
- (54) Chadwick, *op. cit.*, p. 192.
- (55) *Tr V, c. III, l. 79—87.*
- (56) *Tr V, c. III, l. 42—68.* Schurrはこのあたりを、「種差によって形を与えられている」ものは個としての個ではなく、個の *subsistentia* (*Wesensbeständigkeit*) であり、個の個性は付帯性を受けることによって生ぜしめられると解釈する (*op. cit.*, p. 52 sq.)。つまり、あくまでも付帯性が個性の原理であると考ええる。しかしこれまで述べてきたような理由で、私はポエチウスが付帯性や、種形相をも荷う以前の、といて語弊があれば、それらを個的たらしめる、一種の存在的なものを考えていたのではないかと思う。
- (57) *H 77, 80—78, 19. Non enim similiter esset homo Cato sicut Cicero nisi subsistentie, quibus uterque aliquid est, esset etiam numero diverse. Earumque numeralis diversitas eos numero facit esse diversos. etc.*
- (58) Otto, *op. cit.*, p. 17 sq.
- (59) cf. *De Consol.*, lib. III, c. 9 po.
- (60) Nédoncelle (*op. cit.*, p. 217 sq.) は第三章 1.2 の 〈*substantiaque omnis natura est*〉の読みを論じているが、私もこのいみで Stewart の訳よりは Nédoncelle の解釈がよいように思う。Stewart は *if every nature is a substance* と読むが、キリスト論から見ればこれは問題的なわけで、Nédoncelle のように逆に *substance* は *natura* である、ないし *natura* を持つ、と読む方が問題は少ないと思う。このあたりではすでに *natura* が実体的とも解せる書き方であるが、そこを厳密には質と解していると解釈してみたい。あるいは Nédoncelle は文体的によくないというが、*natura* を奪格ととれば、理論的には一番適当であると思われる。
- (61) Schurr, *op. cit.*, pp. 43 sq.
- (62) *H 194, 90—92. Diversum est esse i. e. subsistentia, que est in subsistente, et id quod est i. e. subsistens in quo est subsistentia: ut corporalitas et cor-*

pus, humanitas et homo.

- (63) *H* 195—196.
- (64) *H* 198—199.
- (65) Thomas Aquinas, *In Boetii de Hebdomadibus*, Marietti 1954. lect. II, n. 30.
- (66) G. Schrimpf, *Die Axiomenschrift des Boethius*, Leiden 1966, p. 124.
- (67) Chadwick, *op. cit.*, pp. 207 sq.
- (68) Schrimpf, *op. cit.*, pp. 9, 16, 124.
- (69) *Tr* III, 1. 120, 123.
- (70) *Tr* V, c. III 終りの、神に *substantia* の名を与えるところ（これはベルソナのはなしから神実体のはなしに飛躍しているので、論理的には難のあるところだが）で、神がいわば万物の *subiectum* である、すべてを *subsistere* せしめる原理として *substantia, subiectum* であると言われるところも、参照されたい。
- (71) Nédoncelle, *op. cit.*, p. 237.
- (72) *Tr* V, c. III, 1. 42—43, 54—55.
- (73) Nédoncelle, *op. cit.*, p. 205; Schrimpf, *op. cit.*, p. 21. etc.